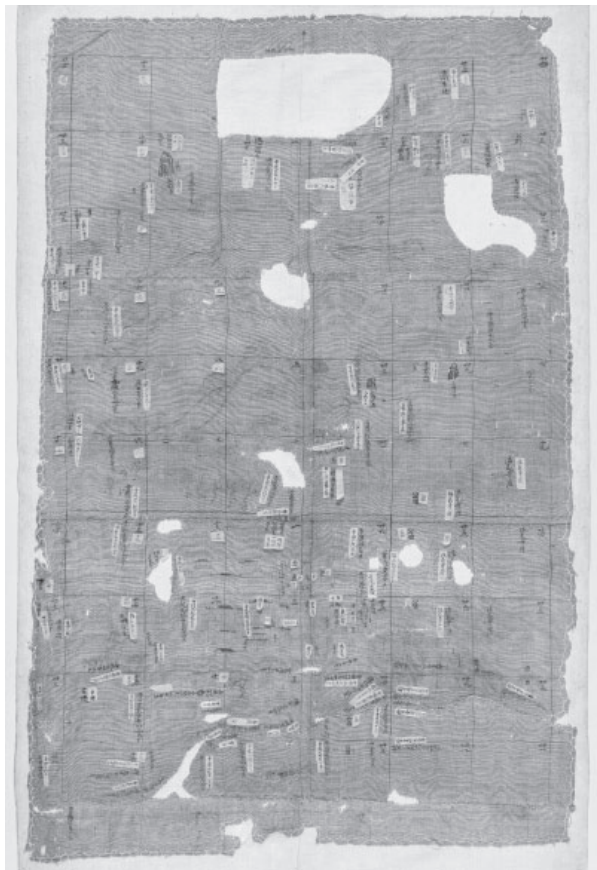


国立歴史民俗博物館の愉悦②

額田寺伽藍並条里図 (国宝)

奈良時代 (8世紀)



戦後は奈良国立博物館に寄託された後に、国の所有になった。一舗。麻布に彩色。縦113.7cm、横72.5cm。重要文化財指定1962年。国宝指定1977年。

国立歴史民俗博物館所蔵の国宝「額田寺伽藍並条里図」は、奈良時代(八世紀後半)に作成された荘園図である。大和国平群郡額田郷を本拠とする古代の豪族、額田部氏の氏寺額田寺の伽藍および寺領を麻布(調布)に彩色で描いたものである。古代豪族額田部氏の氏寺と寺領の範囲を明示した奈良時代後半に作成されたことが推測される貴重な古代荘園図である。

本図は、官営の東大寺とは異なる畿内の中級貴族の氏寺とその寺領の様子が描かれていることが大きな特色とされる。現在は歴史博所蔵であるが、額田寺の後身である額安寺(現在の奈良県大和郡山市額田部寺町)に長く伝来した。絵図には奈良盆地の北西部に位置する額田寺の伽藍を中心に佐保川と初瀬川の合流点およびその北方の額田部丘陵が描かれている。その記載範囲は南北は約一〇〇m、東西は約七〇〇mのほどである。

額田部氏は、その本拠地が大和国を流れる諸河川の合流点という交通上の要地に位置したため水運を掌握し、また馬の飼育にも関係したことから、しばしば外国使節の接待役に任命された。推古天皇(額田部皇女)など王子女の養育を担当したといわれる。鎌倉時代の『聖徳太子伝私記』によれば額田寺は、聖徳太子がその

晩年に田村皇子に譲った熊凝精舎(くまごりしや)の後身であるとも伝承される。

現状ではかなり傷みが進行しており、左右の欠損、大小の穴が存在し、七つの布片に分かれ、綿布に縫いつけられている。記載内容の判読は、全体が褐色に退色しているので肉眼では極めて困難な状況にある。肉眼では墨書や寺の伽藍の朱線、全面に押された「大和国印」の印影などがわずかに確認できるのみである。そのため、歴史博と東京大学史料編纂所は、一九九三年の歴史博企画展示のため、一年半の年月をかけて共同で復元を試み、二〇〇〇年前の原型や色彩を蘇らせた。X線や顕微鏡による観察で図や文字を解読、繊維の間に残る顔料の粒を見つけたし色を再現、麻布も当時の手法で織りあげ、現地調査を加味して復元した。その過程で、現在抜け落ちていた部分は「緑青焼け」によるもので、川や池に相当することなどが確認された。

畿内に残る非東大寺型の古い荘園を素材とし古代荘園絵図分析の方法論的研究を深化させることができれば、荘園絵図に描かれた建物・景観・土地利用の実態把握が可能となり、古代氏族の居住形態や氏寺の寺領経営、条里制施行の実態解明などに大きく貢献することができる。現在、歴史博の共同研究として組織し、こうした点の解明を目指している。歴史博HPでは、オリジナルと復元複製・X線画像の三種を高精細画像として公開している。

条里記載は平群郡九条三・四里、十條三・四里が田形に描かれている。寺院地は平群郡十條三里の三十五・三十六坪、十條四里の一・二・十一・十二坪の六ヶ坪を占め、西に南大門・中門・金堂・三重塔・講堂・僧坊などの主要伽藍、東には「東大衆」や「倉」の表記がある雑舎地区が描かれている。これらは堀で囲まれ、雑舎の南には別区画の南院・馬屋がある。寺院地は東西に長く、その合計は五町一段百七十七歩に及ぶ。具体的な伽藍を描いた本図はたいへん貴重である。また絵図の右上、九条三里二十六坪には「船墓(額田部宿禰先祖)」という注記があり、被葬者が書かれていることも注目され、額田寺が額田部氏の氏寺であったとする推定を裏付けてくれる。

(国立歴史民俗博物館 研究部教授 仁藤 敦史)